

令和5年度 学校評価 指導の重点についての教職員グループ別検証結果

(1)自らの命を守り抜く安全・防災・健康教育	評価	成果と課題	改善策
<p>① 感染症、食、アレルギー、飲酒喫煙薬物乱用防止をはじめ、情報進展に伴う事件・事故、防災、環境保全、国民保護等、健康・安全に係る情報を的確に判断し、主体的に行動する実践力を育成する。 特に、感染症の感染及び拡大のリスクを低減する環境づくりと指導に家庭と協力して努める。 「感染源を絶つ」毎朝の検温、健康観察、「感染経路を絶つ」手洗い徹底、消毒・清掃 「抵抗力を高める」十分な睡眠、適度な運動及びバランスの取れた食事に係る指導</p>	B	<p>①【アレルギー対応】●アレルギーを含む食材（乳糖不耐症を含む）が配膳されそうになったヒヤリハット事案が2件あった。今後も校務員、本人、担任のトリプルチェックをしている。 ○個別プランを個人懇談などを利用して複数対応で作成し共通理解を測った。 ○職員全体研修でエビペンの打ち方を実際に動画を見ながら行い該当学年については学年会議の中でも研修を行った。【安全】 ○消防本部から講師を招きシミュレーション研修を実施し心疾患生徒の救急体制を確立した。 ○保体委員会の生徒と共に、ヒヤリハット箇所を確認したり換気チェック表を作り換気の徹底をはかった。 【健康教育】 ○予定していた健康教育講演会を全て実施できた。今年度は特に、生徒の実態に合った講演内容になるよう講師と綿密な打ち合わせを行い実施した。特別支援学級の生徒対象に歯科衛生士に来ていただき個に応じた歯科保健指導を実施した。 【給食】 ○生徒会の委員会と連携し、衛生面、残食を減らす呼びかけを行った。 ●食育に関する講演会などは実施できなかった。（他の講演会などとの日程調整、講演内容の重複など課題がある。） 【感染症について】 ○教室や廊下の換気を継続してできている。</p>	<p>① ・年度初めに毎年ヒヤリハットが生じているので、給食が始まって1週間ほどは教職員全員に周知徹底し協力体制を整える。 ・各種講演会の日程調整や対象学年の見直し。</p>
<p>② 時間厳守や体幹保持など「きびきびした生活」、換気、環境美化整備など「すがすがしい環境」、挨拶など「さわやかな仲間」をはじめとして、安全安心で規律ある教育環境を確立する。</p>	B	<p>②○チャイムと同時に、あいさつで始まり・終わる清掃指導ができた。教職員も一緒に清掃活動に取り組めた。 ●清掃が行き届かない所がある。</p>	<p>② 分担等について、工夫し、点検を取り入れる。</p>
<p>③ 学校安全マニュアルに基づき安全点検の徹底や体育授業等におけるきめ細かい生徒観察により事故の未然防止を図るとともに、定期的な緊急連絡体制の確認により、事故に即時対応する。</p>	B	<p>③ ○毎月校内の安全点検に取り組み、安全な環境を保つことができた。 ○毎月の定期的な点検の実施により、危険箇所については早急に修理を依頼することができた。 ○体育の授業については事前に用具点検、使用場所の点検を行い、事故の未然防止を行うことができた。 ●修理に時間がかかったり、費用がかかったりするものもあり、早急に動いても、実際に安全な環境になるまでに時間がかかることもあった。</p>	<p>③ 緊急性を要する箇所やそうでない箇所の振り分けを徹底する。安全点検と、営繕とは別物だという意識を持って行う。 担当教員で修理可能な所は担当教員が対応する。</p>
<p>④ 体育・スポーツ活動の楽しさや喜びを味わわせることにより、生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現する資質・能力を育成する。</p>	B	<p>④ ○性教育講演会、心肺蘇生講演会、歯科講演会、薬物乱用防止講演会など健康教育と連携して計画的に実施し、健康について興味関心が持てるように取り組んだ。</p>	<p>④ 講師との講演内容の打ち合わせを綿密にする必要がある。他の講演会との日程調整。（2学期後半に集中していた）</p>
<p>⑤ 家庭や地域、関係機関と連携した防災防犯体制を確立するとともに、危険箇所の把握・改善や予告なし避難訓練、自転車点検・自転車保険への加入等を通して安全に対する意識の高揚を図る。</p>	A	<p>⑤ ○年3回の避難訓練を実施し、そのうち1回は抜き打ち避難訓練。 ○消防署・警備会社など関係機関との通報訓練を、避難訓練と同時に実施できた。 ○昨年までの告知1週間ではいつするか予想できていたので、今年は2学期と長い期間での実施を告知し、より本番に近い状況で実施できた。 ●抜き打ち避難訓練より、生徒がバラバラに散らばっている状況下で、校舎内に残っている生徒がいらないか等の確認が不十分になってしまうことがある。</p>	<p>⑤ 抜き打ち避難訓練から、トイレなどどこまで調べるのかや教師間でどう連携していくか考えていく必要がある。</p>

(2)誇りを感じる学校・学級集団	評価	成果と課題	改善策
① 学校生活の課題について、集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせ、話し合い、合意形成、意思決定して改善することを通し、課題解決力や人間関係形成・社会参画する力を育てる。	B	① ○対話活動を通して生徒同士で考えを深める活動を基本としてプランニングすることができた。 ●生徒主体の活動につなげるにはまだまだ工夫が必要であると感じた。	ICT機器を活用することでより多くの生徒の意見を共有することができる。
② 生徒会・教科係が生活・学習の諸課題について協力・協働して改善する活動を通して、学校内外の生活・学習マネジメント能力を育てる。	B	② ○自らの役割を果たすために積極的に活動に取り組むことができた生徒が多くいた。 ●委員会活動については子どもたちが主体的に取り組むための改善が必要であると感じた。	例年通りの活動ではなく現実を見つめ直し、ブラッシュアップする点は抜本的に活動を変えていく決断力が必要である。
③ 学校行事の選択と集中を通して、集団への所属感・連帯感を高めたり、高い目標をもち、自己を生かし、協力して課題解決したりする主体的、実践的な態度を育てる。	A	③ ○限られた時間の中で、目的を明確にして取り組むことができた。体育祭・文化祭については、生徒に対していくつかの目標を設定・提案し、積極的に啓発するなど、その達成のために自ら考え協力しながら行事に取り組んでいこうとする意識の向上を図ることができた。 ●目的の達成のために、それぞれが思いを持って指導にあたっていたとは思いますが、忙しさもあり、時間に追われる中で、とにかくこなしていくという面もあったことは否めないのではないか。	③ 職員間・学年間・全体の場面で共通理解できる機会を大切にしていく。学年でおこなう行事についても、未来を切り拓く力を身につけさせることができるよう、目的や身につけたい力(※)を明確にして指導にあたっていく必要がある。 (※)例えば ・自分と向きあう力 (自制心・忍耐力・俯瞰する力) ・自分を高める力 (自制心・自尊心・楽観性) ・他者とつながる力 (尊重・受容・共感・相互理解) を授業や行事で、生徒自身の目標として意識させ、ふりかえりや授業の工夫を行う。
④ ノー部活デー（木曜日と土日いずれか）による心身ともゆとりのある中で、効率的、効果的に部活動を行い、自発的・自主的に心身を鍛える生徒を育成する。	B	④ ○どの部活動もノー部活デーを守りゆとりを持って計画的に活動することができた。今年度は進まなかった部活動の地域移行が、来年度は更に進んでいくため、より効率的に、効果的に活動する必要がある。 ●生徒の自発的・自主的な部活動になるよう、教えるべき内容と、教えすぎないという考え方も必要なかもしれない。	④ 平日2時間程度、土日いずれかの3時間程度の練習時間の中で、より効率的、効果的な活動が求められる。生徒もそうであるが顧問も工夫を凝らし活動していく必要がある。

(3)存在感や成就感を大切にした生徒指導	評価	成果と課題	改善策
① 生徒が存在感を実感する中で自己指導力やコミュニケーション力を高めるよう、学習指導と関連付けながら命と人権を根幹に据えた開発的生徒指導を進める。	B	① ○大きな行事では自分が達成可能な目標を設定し、行事終了後に自らを振り返られるような機会を設定した。また、その中でクラスメイトに目を向け、良いところも積極的に声をかけ合うことで自分自身の気付かなかった「良いところ」に気付くことができ、自己肯定感の向上につながった。このような取り組みを行事だけでなく日頃の生活でも意識することで自信が付き、開発的な生徒指導として行うことができた。 ●コミュニケーション能力が低く、すぐに手が出てしまう生徒がいる。また、生徒間暴力で名前が上がる生徒は複数回上がることが多かった。ソーシャルスキルを身につけ、同じ失敗を繰り返さないように指導を続けて行く必要がある。	①様々な場面で自信につながるような、自分の「良いところ」が見つかるような取り組みを継続する必要がある。また、ソーシャルスキルや感情のコントロールが身につくように、自分の言葉で自分の思いが表現できるようにすることでコミュニケーション能力を高めていく。
② 学年担任制による多様な相談体制、ICTによる迅速な調査、スクールカウンセラーとの連携など、ガイダンスとカウンセリングの双方から、問題行動、不登校等の未然防止、早期発見・対応する。	B	② ○学年担任制は行えなかったが、学期に1回の教育相談では期間を1週間に設定し、生徒との対話の時間を十分に設定することや、担任の先生以外にも、生徒の相談しやすい先生を選択できるようにするなど、生徒の相談しやすい場の設定を行うことができた。1年生に向けてはスクールカウンセラーからのガイダンスを行った。また、不登校の未然防止として、早期にスクールカウンセラーに相談するなど、早期対応することができた。またスクールカウンセラーとも情報共有を密に行うことができた。 ●不登校の未然防止にむけて様々な対応、そして早期対応は行うことができたが、結果としては不登校生徒の新規の生徒を減少させることはできなかった。	②生徒が安心して登校できるようにUDの研修やSST、特性理解の研修を継続する必要があると考えられる。しかしながら、不登校の問題については文科省が「学校に登校する」という結果のみを目標にするのではないといいながら、不登校の数が多いためどうにかしなさいということをやったりと文科省の対応にも矛盾を感じる。ただ、不登校生徒は40人ほどいるが、どの生徒に対しても担任、学年の先生を中心に、十分に関係性を築く関わりを行って関わっている。今後も今の関わりを継続していく方向で取り組みとしては十分だと考える。ただ、未然防止しきれていないことに対する検証は必要である。
③ 学校基本方針や生徒会「No More いじめ宣言」により、いじめの定義や実態を啓発し、家庭・地域・関係機関と連携したいじめ対応を進める。いじめアンケート、生活ノート等は、複数の目で点検をし、小さな変化を見逃さず、いじめを積極的に認知し、早期解決を図る。	A	③ ○「No More いじめ宣言」については生徒に共有することができた。また、保護者にも学年通信や学校便りなどで周知することができた。いじめについては積極的に認知を行い、100%解消に至るよう素早く丁寧に、学年の先生を中心に解決に向けて取り組むことができた。また、生活ノートなどの何気ない一言から相談を積極的に行うなど、問題が大きくなる前に声かけ、相談が行えた。 ●いじめを認知して保護者に伝える際に、保護者がいじめの定義を理解されていないことが多かった。そのため、加害者側の保護者が自分の子どもを擁護され、こちらの指導支援についてを理解されないことがあった。	③全教師同じラインで指導を行うことが基本であるため、生徒指導委員会での確認事項、共通理解事項については学年会議や朝の打ち合わせを活用し、必ず共通理解を図る。また、いじめの加害者、被害者どちらの保護者であっても事実を伝える際には細心の注意が必要である。
④ 生徒指導方針、いじめ防止基本方針を発信し、地域と一体となった生徒指導を進めるとともに、警察、福祉、医療等の関係機関と連携しケース会議等による組織的・計画的な個別支援を行う。	B	④ ○警察、福祉、医療と連携して生徒指導を行うことができた。また、ケース会議を行い、実践事例として他の生徒にもきめ細かく対応できるように取り組んだ。 ●生徒指導委員会で共有されたことが各学年で共有されないことがあった。	④現状の取り組みを継続できるように学校全体での共通理解を図る。また、生徒情報を多面的に一括して把握できるように、下記のデータを共有フォルダの中に専用のフォルダをつくる。 【1】小中連絡会の情報一覧 【2】状況調査書一覧 【3】生徒支援名簿 【4】全校生名簿 (篠友、通級、難聴アレルギーなど) 【5】保健調査書まとめ
⑤ 情報技術の仕組み、個人情報、肖像権や著作権の権利、端末利用によるトラブル等を正しく理解させるとともに、保護者と連携し使用時間や使用目的等の利用実態を的確に把握し、関係機関を活用しながら、デジタルシティズンシップ教育を進める。また、相談機関を生徒・保護者に周知する。	A	⑤生徒会で情報機器の取り扱いのルールの設定に取り組む中で、情報モラルを育むことができた。 ⑤家庭での情報機器を使う時間が長く、学習時間が短いことが課題	保護者と連携した家庭での過ごし方の指導を行う。

(4)豊かな人間性・社会性を育む道徳教育、人権教育	評価	成果と課題	改善策
① 他者や自己との対話による「特別の教科 道徳」を要とし、教育活動全体で、自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養う。(中心発問の精査・評価を含めたローテーション授業の実施 保護者・地域への公開)	B	① ○学年内でのローテーション授業を行うことが、資料や主発問を吟味し、深まりのある考えを引き出すことにつながっている。 ○複数の教師が授業をすることで多様な授業を行うことができた。 ●一人ひとりの道徳の授業力向上のため、学年間、教師間の取組の共有や道徳研修の実施が必要。	①学校の道徳教育の重点目標の共通理解を図り、育てたい生徒の姿を具体的に捉えられるようにする。教材、資料など、それぞれの教師、学年が工夫していることを校内で共有できるようにする。また、校内で授業公開し、指導力向上に努める。
② 人間尊重の精神や生命に対する畏敬の念を具体的な生活の中に生かせるよう、全教育活動を通じて命と人権の大切さを教え、共に生きる心を育む。	B	②生徒会を主体として、人権課題を学ぶ研修会や人権研修ツアー(全体)、ボランティア活動への参加を呼びかけ、継続することができた。 ●参加メンバーが広がるような活動、日常生活の中で人権課題に気づく活動機会となることが求められている。	②人権ミライエプロジェクトを中核にした「人権学習」のスタイルを大切にしながら、日常生活においても「人権課題」に気づく活動になるように工夫して、生徒主体型、参加型への展開へと図る。
③ 地域に根ざした伝統芸能や多様な芸術を鑑賞したり、地域貢献活動に参加したりすることにより、ふるさと「丹波篠山」を愛する心を培い、我が国や外国の文化・伝統を理解し、尊重し合う生徒の育成を図る。	B	③ ○わくわくオーケストラでは、オーケストラの演奏を鑑賞し、クラシックの魅力や西洋音楽の文化を知った。 ○地域貢献活動では、生徒会役員がデカンショ祭りの会場準備と後片付けに参加することで、「丹波篠山」の文化・伝統を尊重できた。市民センターまつりでは、希望参加者が準備や店の直営補助などにボランティア活動として参加できた。ABCマラソンの運営補助にも多数の生徒が応募し、地域の活動を盛り上げている。また、四つの力委員会に参加し地域の方と話し合うことでより良い学校づくりに貢献できた。体育祭では地区別対抗リレーを実施し、地域に根ざした種目を実施できた。 ●四つの力委員会で話し合った内容など全校生徒に伝えていく工夫が必要。	③コロナ禍からの生活から解放された今、社会やふるさとのつながりをもち、働くことへの学びを深めるため、地域貢献活動においては、デカンショ祭りの準備・片付けだけでなく総踊りへ参加したり、街頭で各種募金活動を行ったりするなどの諸活動が今後考えられる。ただし、生徒にも教職員にも負担になりすぎないように配慮しながら取り組むことも考えていく。 ③生徒会役員が四つの力委員会に参加しているので、その話し合った結果などを全校集会を利用して伝えていく。
(5)将来や社会の糸口をつかむキャリア教育	評価	成果と課題	改善策
① 職業構造の変化や新産業の創出、SDGs等も踏まえつつ、学ぶことと将来や社会とのつながりの中で自己の生き方を考え、社会的・職業的自立に向けた資質・能力や社会参画する意欲・態度を育む。	B	① ○体育祭や文化祭などの行事において、SBGsなど身につけたい非認知能力を明示して、生徒の達成目標を意識して取り組ませることができた。	それぞれの行事や体験を単発で行うのではなく、体系だてて計画する。
② 生徒が能動的に生き方を考え、自らの意思と責任で自らのよさを生かす進路を選択できるよう、キャリア・パスポートを有効に活用し、キャリア形成に資する個に応じた組織的・計画的な指導を行う。	B	② ○例年通りのトライやる・ウィークの取り組みができた。 ○キャリア・パスポートを小学校から引き継ぎ、小中連携して取り組めた。	授業において「未来を切りひらく力」の育成に向け、他者との比較ではなく、自分の良さ、強みを考える機会や、自分の考えをアウトプットしたり他者と対話する場面をつくる。
③ ライフプランを含めたキャリア教育を通じて、主体的に生涯の生活を設計し、仕事と生活の調和(ワーク・ライフ・バランス)や、社会における自分の役割、自分らしい生き方について考えさせる。	A	③ ○夢プランに参加することで、市内の高校の情報が分かり、進路に対する意識を高められた。	社会に目を向けさせる話題を提供し、社会と自分がつながっているという当事者意識の育成に努める。
④ 体験活動のねらいを明確にし、事前事後指導を充実することを通して、地域の人々とつながりを深め、勤労・奉仕等を尊ぶ心や、社会の一員としての自覚、社会参画への意欲、態度を養う。	B	④ ●3年間を見通した体系的なカリキュラムの作成が必要である。	

(6)基礎力・思考力・実践力を育む学習指導・授業改善	評価	成果と課題	改善策
① 授業スタンダード(予習・目標理解・個人思考・集団思考・振り返り)に基づき、各教科等の見方・考え方を創発し、個と集団を思考が行き来する「主知的・対話的で深い学び」を進めるとともに、生徒が自らの学習を振り返り次の学習に向かうことができるよう指導と評価の一体化を図る。	B	<ul style="list-style-type: none"> ●授業始めに授業の目標や授業の流れの提示、個人から集団への思考、授業の振り返りなど方法としては定着してきた。ただ、主体的で対話的という部分に迫れている授業かどうかには疑問がある。 ○ユニバーサルデザインなどの研修を通して、視覚的支援、人的支援等を取り入れ実践共有を繰り返すことで分かりやすい授業を実施することができた。 ○1人一回の研究授業が実施でき、教員の授業力の向上につながった。 	①授業スタンダードに基づいて、授業を進めることが出来てきたが、授業の中でさらに「主体的・対話的で深い学び」につながる授業内容になるよう、各授業において、自己決定や対話の場面を意識して取り入れる。
②空間的・時間的制約を緩和するICT環境等を用いて、知識・技能の定着を図る「個別最適な学び」、仲間の考えから自己の考えを深める「協働的な学び」、自己の学びを改善し、推進し続ける「主体的な態度」における学びの質を高める取組を推進する。	A	<ul style="list-style-type: none"> ○朝学習にタブレットドリルを取り入れ、生徒が自分に合った問題を選んで問題に取り組むことで個別最適な学びを推進できた。 ●課題としては、教員間のスキルの差がある。デジタル教科書の使用については、十分に活用できていない部分もある。 	②ICTを活用した共同的な学びの研修ができれば、さらに指導力を向上する事ができると考える。
③ 知識・技能が他教科等や生活で活用できるよう、見通しのある予習、振り返りのある復習を含む家庭学習に係るガイダンスや課題の個別化、放課後学習の充実を図る。	B	<ul style="list-style-type: none"> ●授業の予習や復習になる課題を提示して家庭学習の習慣化を促している学年や教科がある。しかし、生徒自身が主体的に取り組む態度には結びついていない状況にある。アンケート結果では、家庭学習の時間が少ないと出ている。「がんばりタイム」を設定し、放課後に学習する機会を持っているが、主体的に参加している生徒は少ないのが現状である。 ●放課後学習は業務改善、部活動等の視点からも、時間の確保が難しい。 	③各教科毎に家庭学習の方法を指示し、取り組ませ、定期テスト点数や授業内容の理解度が向上している事を実感させたい。家庭学習や自主学習の効果的な促し方について、校内を始めとする良い事例をモデルにした研修が必要である。 <ul style="list-style-type: none"> ・家庭学習においても自己決定、選択を取り入れる。 ・「やりたい」「できそう」「達成感」を味わえるような授業、宿題を考える。 ・家庭学習は時間を目的とせず、知識、技能の定着などを目的とし、「わからないところをわかるようにする」事が学びの基本と考える。 ・「学び方」「学ぶ工夫」について、授業への取り組み方や家庭学習の工夫について生徒同士の対話を計画する。
④ 新学習システムを活用した少人数指導や補充的な学習、発展的な学習など、系統性を重視したつまずきの解消を図り、個に応じた個が生きる個別最適な学びの授業改善を進める。	A	<ul style="list-style-type: none"> ④○同室複数指導では、支援が必要とする生徒に寄り添い、全体の中で会話練習やインタビューテストに向けての練習を行うことができた。苦手意識をあまり感じることなく授業を受けることができていくと思う。 ○少人数ゆえに質問しやすく自分の意見が発表しやすくなった。少人数≠その教科が苦手なので、個々の学力に応じた指導もできた。 ●家庭での学習の指導は本来家庭の役割であるのに、それを学校に求める家庭もあり、対応に苦慮する。 ●苦手意識のある生徒は学習が受動的になるので「能動的な学習」への指導が難しい。 	④・「わからないことがわからないといえる環境」「話しやすい環境」が主体的に学習に取り組む態度の育成にもつながると考える。そのような環境作りに取り組んでいる。生徒個々の性格や状況を考慮に入れた環境を作っていく。 <ul style="list-style-type: none"> ・教師が「教える」から「生徒が学ぶ」への授業の転換を行い評価活動も工夫していく。生徒自身が学び方を振り返る場面を作つき、自己決定やアウトプットの場面を積極的に取り入れる。

<p>⑤ 特別支援教育を中核に据え、教育支援計画における合理的配慮と一貫性のある支援、及びユニバーサルデザインについて、全教職員の共通理解のもと組織的にPDCAサイクルを推進し、豊かな人間関係づくりとともに伸びる力を育成する。</p>	<p>B</p> <p>⑤【連携】 ○保護者：入学予定児童及び保護者と面談等を通じ移行期を安心して過ごせるよう取組ができた 医療：心身の不調が現れている生徒の受診に同行し主治医からの指導・助言を職員で共有した 福祉：卒業後の支援を見据えて、「社会福祉課」の保健師へと相談をつないだ 校内：養護教諭による性教育等が実施できた（篠友） 教科担当者会をもち、特性や対応について共通理解して指導支援することができた（篠友） 小中：各校の実態と取組の共有を行うことができた。 ●小中：小学校低学年・中学年の情報が引継がれないこないことがある。（高学年で落ち着いても、中学校で不適応起こすリスクがある） ●学年特支－篠友－養護教諭－生指－特支Co.の連携が一層すすむように体制を整える必要がある。 【ユニバーサルデザイン】 ●事例とミニ研修の内容を関連づけ、より実践的な研修にする必要がある</p>	<p>【連携】 ・小中連絡会で特支の引継ぎが系統的に進むよう、資料様式に「就学指導」「検査歴」「通級歴」のチェック項目を追加する （必要な内容は、SF引継ぎ等で聴取る） ・教育支援委員会、生徒指導委員会、不登校対策委員会の情報をつなぐ→学年会等で確実に共有する ・教育支援委員会のメンバーを構成し直し時間割枠内で委員会が開催できないか検討する</p> <p>【ユニバーサルデザイン】 ・事例を学年特支や篠友担任等が提供し支援方法等について研修をする</p>
<p>⑥ 授業時数を確保し、言語能力（英語によるコミュニケーション能力を含む）、情報活用能力、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力や現代的な諸課題に対応する資質・能力を教科横断的な視点で育成する。</p>	<p>B</p> <p>○子どもたちが主体的に活動する場面を多く設定し自らの意志を伝える機会を多く提供することができた。 ●ICT機器の活用についてはさらに研修を重ねることでより効率的に活用できると考える。</p>	<p>いくつかの表現を提示することでさらに子どもたちの活動を活性化させることができる。またICT機器を補助機器として有効に活用し子どもたちの情報活用能力を高めることができると考える。</p>
<p>⑦ 読書への興味を深めるとともに、創意工夫して読解力向上の取組を推進する。</p>	<p>B</p> <p>⑦○学級文庫の設置により、朝読用の本を忘れた生徒が借りたことをきっかけにその本に興味をもつことがあった。 ○コロナの5類移行を機に、文化委員が貸出返却手続きをできるようにしたところ、委員が自分たちの活動に積極的に取り組む時間が多くなった。 ○委員会活動で、全校生徒に対する本を通じた働きかけが多くなり、生徒から生徒への発信が多いほど学校図書館への意識向けが進んだ。 ○1・3年生・篠友学級生に対し、国語などの授業内で蔵書を利活用した活動を行ったところ、1年生の貸出率の向上や休み時間にも本を使って調べ学習する姿が見られた。 ●行事があると来館者が減る。 ●昼待ちだけではゆっくり本を選ぶことができないが、教職員が図書室につくことができないため、時間増は難しい。</p>	<p>⑦国語科に限らず、学習指導要領総則第3.1(7)に基づき、担当者の働きかけと全教員の活用の実践が合致するよう、蔵書を活用した授業に関する研修の機会を増やし、教職員向けの案内の発行に取り組む。</p> <p>⑦生徒が個人の読書に留まらずに、ビブリオバトルやブックトークなどで本を通じて交流する機会がもてるように、教科担を中心に声掛けする。</p>

(7) 支え愛に満ちた活気あるコミュニティ・スクール	評価	成果と課題	改善策
① ホームページ、学校だより、オープンスクール等により、めざすべき子ども像や教育活動の目標や内容を具体的に説明し、家庭・地域の参画を促進する社会に開かれた教育課程を進める。	A	①○定期的なホームページ更新や毎月の学校便りの発行など、生徒にかかる学校の情報を、適宜発信することができた。 ②○「四つの力委員会」では、生徒会役員と学校運営協議会の方とで、学校生活についての情報交換や、「篠山中の強みと弱み」について検討し、「強み」をどういかに、「弱み」をどう克服するかについて話し合い、自分たちができることについて具体的に考えた。 ③○学校運営協議会と連携を取り、外部から講師（BEET、いなかの窓）を招き、スライド作成のポイントやキャリア教育の観点をふまえた将来に向けての有意義な講演を実施できた。 ④○小中連携により、ユニバーサルデザインの研修を行い、識見を深めた。また生徒指導、特別支援の観点からも適切な情報交換、共有ができた。 ⑤○入学者説明会をオンラインで行い、体験授業を中学校で実施した。その際、施設見学も行い、中学校の雰囲気を楽しむことができた。	①～③四つの力委員会の開催について、地域の方々と意見交流する場を設定し、生徒と学校生活や将来について話し合いができるような機会をもつ。その話し合った結果などを全校生徒に伝えていく。また、学校の教育活動の方向性や役割について、丁寧に知らせていく。
② 生徒会と学校地域運営協議会が協議する「四つの力委員会」により、社会や将来の糸口となる、夢・やりがい・やすらぎ（安全安心）を体感する教育を進める。	A		
③ 学校地域運営協議会の協力のもと、教育課程の評価改善や、人的物的支援などについて、ICTを活用した社会との連携も行いながら、カリキュラムマネジメントを効果的に進める。	B		④入学者説明会は、オンラインを継続し、出前授業を中学校で実施して校舎見学や中学校生活の雰囲気を味わえるよう工夫する。部活動見学については入学者説明会時には実施しないが、地域移行もあり、部活動の在り方を丁寧に説明していく。
④ 小・中・高等学校の連携を密にし、児童生徒・教職員・地域の交流を通して、地域の学校としての学びと育ちの連続性を確立する。	B		
(8) 田ごころで子どもとともに学ぶ教職員組織	評価	成果と課題	改善策
① 教育は“今日行く”を行動の基本におき、生徒・保護者・地域住民のつぶやきに敏感に気づき、複数で即時即日対話し、課題と改善の方向性を共有する。（素早く丁寧に、そして笑顔で）	A	①○アフターコロナにおいて学校の教育活動を見つめ直し、生徒の「未来を切り拓く力」育成のため、生徒・保護者・地域住民の方々に学校の教育活動の方向性を知らせ、その目標の下、工夫をしながら保護者、地域とのつながりをもって授業、学校行事を実施した。 生徒指導についても、素早く丁寧に、そして笑顔でをモットーに取り組めた。 ②○毎職員会議でのユニバーサルデザイン研修を実施。 一人一回の研究授業や学年での道徳研修、生徒指導や特別支援のOJTなど資質向上に向け取り組めた。 ○学校行事の目的の具体化（STG s、SBG s） 体育祭や文化祭において「結果よりも過程が大切」とし、行事を通じて、どのような力が身についたかを考えさせた。	①社会に開かれた教育活動を実現するため、教育課題や方向性を共有する場面（参観日、学校運営協議会、各行事など）を作っていく。
② 兵庫県資質向上指標により育成目標を重点化し、学年担任制、一人一研究授業を通じ、保護者や地域の期待に応えられる豊かな人間性、専門性と実践的指導力の向上をめざし、研究と修養に努める。	B	●職員が人事異動により代わっていくことで、危機管理意識や生徒指導・不登校の未然対応意識や初期対応など、薄れていかないよう職員会議などでの振り返りや研修が必要と感じる。 ③○職員会議、朝の打合せなどで随時確認し、教育公務員として適切な対応、行動を心がけるよう意識できた。	②危機管理や生徒指導、不登校対応など、職員会議やミドルリーダーのOJTなどを活用し、職員室内での対話を増やす。 ②ユニバーサルデザイン研修をすすめ、授業研究を計画的に実施し、資質向上に資する。
③ 法令、社会通念に基づき、非違行為は教職員全体の信用・信頼を損なうことを深く理解し、教職員としての誇りと責任をもって自己の行動を律するとともに、情報化、グローバル化など社会の変化に対応した教育観を培う。（職員申し合わせ事項の実行）	B		③非違行為等を起こさず、信頼される学校づくりのための個々の意識を高める。
④ 1人1台タブレットを利用した校務・業務の効率化・情報化、事務作業精選、バック・キャスト（ゴールを精選し、逆算して計画）による教育活動、会議の効率化（会議資料の事前配布）、ノー部活デー（木曜日と土日いずれか）や定時退勤日の徹底、記録簿によるタイムマネジメント、計画的な年休取得などワークライフバランスの保持と勤務時間の適正化を進める。	A	④○外部の講師を複数回招き、教職員のICT端末の活用能力の向上に取り組めた。グループのクラスルームの活用など教職員のICT活用能力の向上があった。 ○クラウドでの生徒の出席記録や掲示板、部活動連絡メールの創設、テストの自動採点の導入により採点時間の大幅削減など、教職員の校務の効率化に向け努力できた。 ●多忙化の解消に向けてさらに業務改善を進める。	④学校行事や教育活動など（体育祭・文化祭）の開催方法の工夫と、目的の明確化と意識化 ④教育関連文書などの精選 ④業務を計画的に進め、タイムマネジメントの徹底や定時退勤の完全実施